



# 筑紫女学園大学リポジット

## 小学生の遊び場から見る都市公園再整備の課題

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安恒, 万記, YASUTSUNE, Maki メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/59">https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/59</a>

# 小学生の遊び場から見る都市公園再整備の課題

安 恒 万 記

## A Study on Primary Schoolchild's Playground from the City Park Regenerating in Fukuoka-City

Maki YASUTSUNE

### 1. はじめに

子どもたちの外遊びの衰退化は多くの大人たちの懸念するところであり、その要因として犯罪をはじめとする社会の問題や、塾通いによる遊び時間の減少という子どもの生活時間の問題、画一的な公園計画や規則による自由な遊びの展開の難しさや自然の減少という遊び場所の問題など様々な問題が指摘されている。

小学生の安心安全な遊びのために福岡市ではH16年より「放課後等の遊び場づくり事業」が進められ、H23年現在20の小学校で事業が実施されている。放課後の学校施設を利用して、安全に自由に遊びができる場や機会をつくる試みは、特に小学校低学年の子どもたちの安全・安心のみならず自発的・能動的な遊びを支えている<sup>\*1)</sup>。しかし、行動範囲が広がり見守られている安心感よりも自由な遊びを求める高学年の小学生にとっては、校庭は必ずしも魅力的な遊び場とは言えず、「放課後の遊び場づくり事業」においても小学校高学年の参加者が少なくなる傾向が見出されている<sup>\*1)</sup>。

一方、子どもの遊びの場としての公園の状況に目を向けてみると、昭和31年に施行された「都市公園法」「都市公園法施行令」以降、住民一人当たりの公園面積の増加を目指して整備された数多くの公園が、40年前後を経て施設の老朽化と樹木の生長、周辺住民のニーズとの不整合や犯罪などへの不安などさまざまな問題を抱え、ワークショップ方式による再整備が進められている。地域の公園が愛着を持って親しまれ、地域の魅力づくりに資することを意図し、加えて地域自治の契機となることへの期待をも担っている。

本研究は、公園の再整備計画策定におけるワークショップの役割と、ワークショップが地域コミュニティに与える影響を明らかにすること、加えて子どもの豊かな遊び場の整備課題を明らかにすることを目的としている。本稿ではワークショップ手法によって再整備された公園の再整備の課題を、小学生の遊び環境と遊びの実態とともに報告する。

## 2. 研究方法

### (1) 調査の内容

小学生の遊びの実態と問題を把握するために小学生へのアンケート調査を実施した。アンケート調査の内容は、外あそびの頻度や場所、内容、友だちなど外遊びに関するものと、公園の施設に対する評価や遊ぶ頻度、公園に望むものなど公園に関するものとして構成した。

### (2) 調査対象者の選定

調査対象としてH19年にワークショップ手法を用いた公園再整備を行ったY公園の立地する小学校区であるH小学校の4年生と5年生を選定した。Y公園再整備計画のためのワークショップを開催したH19年、H小学校5年生の1クラスにおいて2年間をかけての総合学習において、「みんなで作ろう ほくらの町の公園」というテーマで、クラスで行ったY公園アンケートの結果をもとにY公園の箱庭を作り、文化祭で発表と展示が行われている。また、小学4年生、5年生はいわゆるギャングエイジと呼ばれる年代で、遊び集団の固定化と継続化が見られる時期であり、加えて留守家庭子ども会への入会年齢を超えるため、放課後の遊び場が校庭に限定されず、行動範囲の広がりや嗜好による遊び空間の選択の幅が見出せるものと考えた。

H小学校の協力を得て、担任を通じて4年生（全3クラス85名）と5年生（全3クラス85名）に配布し、授業時間中に記入してもらい、4年生80名、5年生83名、合わせて163名の回答を得た。

表1 調査対象者

	男子	女子	総数
4年生	39	41	80
5年生	46	37	83

### (3) 調査対象者および地域の概要

H小学校は福岡市の中心部にほど近く、都市化の進んだ地域に位置している。JRの駅にも近く、住宅地や商業地、公共施設の多く立地する地域で、近くには郊外型の大規模店舗等も立地している。共働き世帯も多く、「留守家庭子ども会」が設置されている。「放課後の遊び場事業」は採択されていないが、校庭その他の施設の地域活動への貸し出しは17時以降に限定されているため、その時間までは生徒たちが放課後の校庭で遊ぶ姿も多く見受けられる。

校区内には街区公園が6カ所、幼児公園が1カ所、都市緑地が2カ所あり、隣接する小学校区内にも地区公園をはじめ多くの公園が立地している。

## 3. 小学生の屋外遊び環境

### (1) 屋外遊びの実態

まず、小学生の外遊びの実態を明らかにするために、外遊びの頻度、嗜好、場所や遊びの種類に

ついて見てみる。

外遊びの頻度は表2に示すように、「週に1～2日」が最も多く全体の35%を占めており、次いで「ほとんど毎日」と「週に3～5日」が同数で24.5%である。「ほとんど外で遊ばない」子どもも1割以上おり、ギャングエイジ世代の子どもの外遊びはあまり多くはない。しかしながら、男女別に見てみると、男子は「ほとんど毎日」が最も多く32.9%、次いで「週に3～5日」が31.8%であるのに対し、女子は「週に1～2日」が最も多く46.2%、次いで「ほとんど遊ばない」が21.8%と、性別による外遊びの頻度に大きな差異が認められる。

表2 屋外遊びの頻度

	ほとんど毎日	週に3～5日	週に1～2日	ほとんど遊ばない	総数
男子	28	27	21	9	85
	32.9%	31.8%	24.7%	10.6%	100.0%
女子	12	13	36	17	78
	15.4%	16.7%	46.2%	21.8%	100.0%
全体	40	40	57	26	163
	24.5%	24.5%	35.0%	16.0%	100.0%

では、外遊びの好き嫌いを見てみると、全体の半数近くが「とても好き」と答えている。男女別に見てみると、6割以上の男子が外遊びを「とても好き」と答えているのに対し、女子では外遊びが「とても好き」なのは28.2%と大きな差が生じている。さらに、男女それぞれ学年別に見てみると、男子は4年生と5年生で外遊びの嗜好に大きな差が生じないのに対し、女子は4年生に「とても好き」の割合が高く、5年生に「あまり好きではない」の割合が高くなっており、女子は学年により外遊びの嗜好に差が生じている。

表3 屋外遊びの嗜好

		とても好き	まあまあ好き	あまり好きではない	嫌い	総数
男子	4年生	27	8	3	1	39
		69.2%	20.5%	7.7%	2.6%	100.0%
	5年生	27	12	7	0	46
		58.7%	26.1%	15.2%	0.0%	100.0%
小計		54	20	10	1	85
		63.5%	23.5%	11.8%	1.2%	100.0%
女子	4年生	16	20	4	1	41
		39.0%	48.8%	9.8%	2.4%	100.0%
	5年生	6	17	12	2	37
		16.2%	45.9%	32.4%	5.4%	100.0%
小計		22	37	16	3	78
		28.2%	47.4%	20.5%	3.8%	100.0%
全体		76	57	26	4	163
		46.6%	35.0%	16.0%	2.5%	100.0%

小学生の子どもたちの外遊びの場としての回答は、「公園」が最も多く全体の約半数である。次いで「校庭」の32.5%である（表4）。公園の具体的な名称は全員が記述してはいなかったものの、Y公園が最も多く、校区内の街区公園6ヵ所の中では最もよく遊ばれている。また、ヘリコプター公園やセミ公園、まるまる公園など、街区公園の正式名称ではなく愛称での記述も多く見受けられ、地域の公園に対する愛着がうかがえる。また、公団住宅内のプレイスペースをはじめ、校区内外の街区公園名を数人づつが記入していることに加え、「その他」の中には大型店舗の裏や秘密基地などがあがっている。男女別に見てみると、男子は「公園」が過半数を占め、他を圧倒しているのに対し、女子は「公園」と「校庭」がほぼ同数であり、また「自分の家の庭」や「友だちの家の庭」など守られた空間で遊んでいる傾向がうかがえる。

表4 屋外遊びの場所

(複数回答)

	自分の家の庭	家の近くの道路	家の周りの駐車場など	友だちの家の庭	校庭	公園	その他	総数
男子	7	6	6	8	20	49	16	85
	8.2%	7.1%	7.1%	9.4%	23.5%	57.6%	18.8%	100.0%
女子	15	2	6	9	33	34	15	78
	19.2%	2.6%	7.7%	11.5%	42.3%	43.6%	19.2%	100.0%
全体	22	8	12	17	53	83	31	163
	13.5%	4.9%	7.4%	10.4%	32.5%	50.9%	19.0%	100.0%

外遊びの種類で最も多いのは図1に示すように、「ケイドロなど鬼ごっこ」で全体の41.1%、次いで「サッカー」で35.6%、「ドッジボール」32.5%、「自転車」31.3%と、屋外ならではの遊びが上位を占めているものの、時代を反映して「カードゲーム」や「携帯ゲーム機」がそれぞれ23.9%、19.0%となっている。男女間での遊びの違いとしては、女子は「サッカー」や「野球」などの球技が少なく、「その他」として公園の遊具を使った遊びや「おしゃべりをする」や「うろうろする」などの自由記述が見られる。

遊ぶ友だちの人数は、図2に示すように「3人くらい」が最も多く全体の22.1%、次いで「5人くらい」で20.2%と概ね5人くらい以下のグループで遊んでいる様子が見られるが、「10人以上」の集団で遊んでいる子どもも1割弱いる。また、表5に示すように「同級生」の友だちと遊ぶ子どもの割合が圧倒的に多く全体の9割を超えているが、「上級生」や「下級生」など近い年齢の異年齢集団で遊ぶ子どもも2割前後おり、もう少し離れた年齢間、「近所の小さな子ども」や「近所の大きなお兄さんやお姉さん」と遊ぶ子どもも少数ながらいる。

また表6に示すように、「友だちと約束をして出かける」子どもが最も多く全体の87.1%を占める一方、友だちを誘いに行ったり、誘ってもらったり、よく遊んでいる場所に行き友だちを探したりと、遊ぶ友だちを探してお互いの家を行き来したり、遊びの拠点となっている場所があればそこに探しに行く、といった小学生の行動がうかがえる。

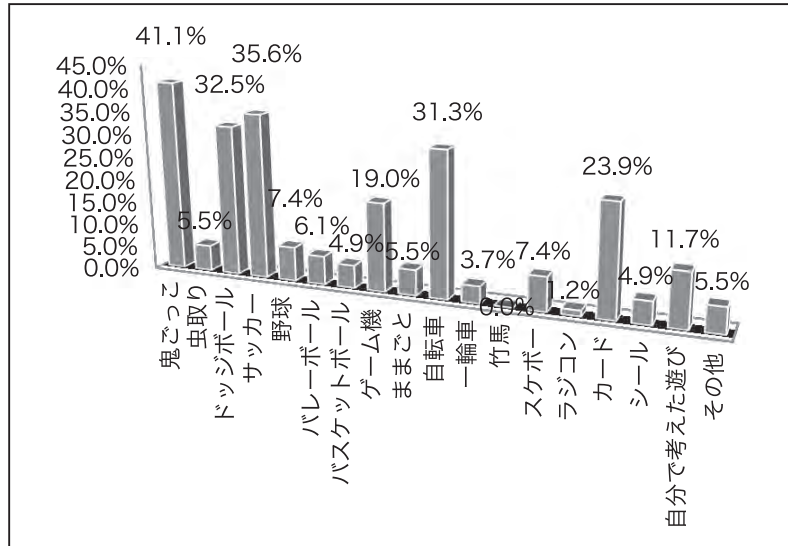


図1 外遊びの種類 (N=163) 複数回答

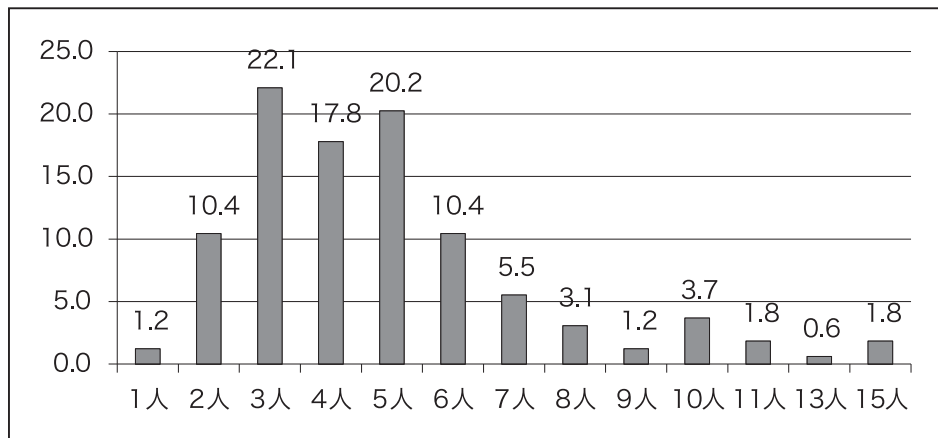


図2 遊ぶ友だちの人数 (N=163)

表5 遊ぶ友だち

同級生	下級生	上級生	きょうだい	近所の大きいお兄さん、お姉さん	近所の小さい子ども	その他
151	30	36	45	3	9	7
92.6%	18.4%	22.1%	27.6%	1.8%	5.5%	4.3%

(複数回答) N=163

表6 遊びに行き方

一人でふらっと行く	友だちと約束をして出かける	よく遊んでいる場所に行つて友だちをさがす	友だちの家にさそいに行く	友だちがさそいに来たら行く	その他
25	142	30	37	46	5
15.3%	87.1%	18.4%	22.7%	28.2%	3.1%

(複数回答) N=163

## (2) 地域の公園に対する評価

Y公園はH19年のワークショップを経て改修計画を策定し、H20年に全面改修を終えた。ワークショップは計4回開催され、様々な年代の地域住民が4つのグループに分かれて意見を出し合い、公園再整備に向けて基本方針を定め、導入施設の選定、配置などを図面化する作業を行った。具体的には、第1回のワークショップで開設後30年を経過したY公園の現状を見学し、欲しいものといらないもの、残すものと削除するものについての参加者の意見をグループごとに図面に描き込む作業と整備後の公園イメージを考えた。第2回のワークショップでは「緑が豊かで、明るく、清潔で、安全な小さな子どもからお年寄りまで楽しめる公園」という基本方針が参加者によってまとめられた。ワークショップ参加者には小さな子どもや小学生も多く、もちろん地域の公園愛護会の人や自治会の人参加も多く、基本方針としては総花的なものとなった感は否めない。しかし、第3回ワークショップでは、自由広場やウォーキングコース、健康ベンチやパーゴラ付きの縁台など大人向けの施設への要望やサクラやケヤキをはじめ、季節を感じさせる樹木（イロハモミジやキンモクセイなど）やビオトープ池など自然を感じることでできるものへの要求が見出された。また、開園時に設置されていたヘリコプター型の遊具（ワークショップ時には既に撤去されていた）にちなんで愛称として「ヘリコプター公園」と呼ばれていることから、ヘリコプター型の複合遊具の提案を事務局から行った。第4回ワークショップでは、事務局から提案された計画図面に対してウォーキングコースを少しでも長くするための径路の提案や入口広場の形状、特に自転車を置くスペースへの配慮などが参加者からあり、再整備後の公園利用への希望が提案の中ににじんでいた。

また、H小学校の文化祭での「みんなで作ろう ほくらの町の公園」案では、欲しいものとして「ブランコ」と「運動広場」が圧倒的多数でアンケートから抽出されており、加えて自転車置き場への要望発表されており、それに基づいて作られた公園箱庭の展示がなされており、再整備後の開園式には多くの小学生が参加した。

以上のようなワークショップによる公園再整備計画を経たY公園が3年を経過して、小学生にどのような評価をされているのだろうか。

Y公園の利用状況は表7に示した通り、「あまり遊ばない」が最も多く35.0%、次いで「よく遊ぶ」と「まあまあ遊ぶ」がともに24.5%である。屋外で遊ぶ場所として「公園」を挙げた子どもの中ではY公園は最もよく遊ばれている公園であり、全体としても約半数の子どもが「まあまあ遊ぶ」以上の利用頻度となっている。

表7 Y公園での遊び頻度

よく遊ぶ	まあまあ遊ぶ	あまり遊ばない	まったく遊ばない	総計
40	40	57	26	163
24.5%	24.5%	35.0%	16.0%	100.0%

では、そのY公園に対する評価として最も高いのは「広場」で「とてもよい」と評価している子どもが半数近くである（図3）。次いで、「休憩場所」が38.2%、「全体の雰囲気」が31.5%、「遊具」が29.9%、「木」が29.2%である。また平均値プロフィールで見ると、やはり「広場」が最も高く3.1

ポイント、次いで「休憩場所」3.0ポイント、「木」と「全体の雰囲気」が同様に2.9ポイントである。

逆に最も評価が低いのは「花壇」で、「とてもよい」と評価している子どもの割合が16.1%であり、次いで「親しみやすさや好ましさ」で23.4%、「利用している人たち」24.3%である。平均値プロフィールで見ても、「親しみやすさや好ましさ」は2.6ポイントと、最高ポイントから0.5ポイント下回っている。次いで、「入口」や「花壇」への評価が低く、いずれも平均値プロフィールでも2.7ポイントである。

この「親しみやすさ好ましさ」をY公園の利用頻度で比較してみると、表8に示すようにY公園で「よく遊ぶ」子どもは愛着が「とてもある」と回答した割合が最も高く(34.3%)、「まあまあ遊ぶ」と「あまり遊ばない」子どもは愛着が「まあまあある」が最も高く(それぞれ42.9%、44.2%)、「まったく遊ばない」子どもは愛着が「全然ない」割合が最も高い(39.1%)。

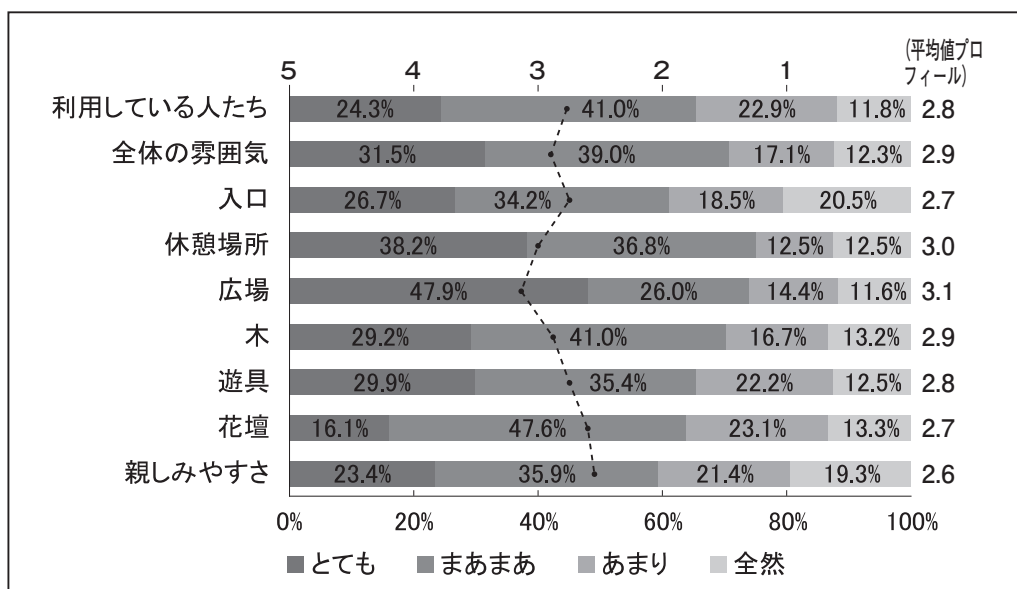


図3 Y公園に対する評価

表8 利用頻度と愛着

頻度	とてもある	まあまあある	あまりない	全然ない	無回答	総計
よく遊ぶ	12	8	8	7	5	40
	34.3%	22.9%	22.9%	20.0%		100.0%
まあまあ遊ぶ	5	15	9	6	5	40
	14.3%	42.9%	25.7%	17.1%		100.0%
あまり遊ばない	13	23	10	6	5	57
	25.0%	44.2%	19.2%	11.5%		100.0%
まったく遊ばない	4	6	4	9	3	26
	17.4%	26.1%	17.4%	39.1%		100.0%
総計	34	52	31	28	18	163
	23.4%	35.9%	21.4%	19.3%		100.0%



## 4. 子どもたちの要望からみる公園の現状とワークショップの課題

### (1) 要望と公園の現状

子どもたちの公園に対する希望や要望を、Y公園に関するアンケート調査の中で「こんな公園がいいな」という自由記述してもらった結果からみしてみる。自由記述は183名中95名が記述しており、その記述の中から共通するキーワードを抽出したものが表9である。

「おかしやさん」や「変身する公園」など夢見がちなものもあるものの、共通するキーワードとして多くの回答があったものは「ペットのフン」や「遊具」「きれい」「広さ」「ボール遊び」など子どもたちの遊びの現状が反映されていると考えられるものが多い。遊具の種類や数量に物足りなさを感じており、小学校高学年用の遊具を求める声が多い。また、野球やサッカーをするには広さが足りないため、サッカーゴールやバスケットゴール、野球のベースなどスポーツ施設の一部の設置を望む声が多く、工夫して球技を行おうとする様子が見え始める。

公園入口の入りやすさ、特に自転車でのアクセスが容易でないことへの不満も大きい。Y公園では再整備にあたって公園入口を開放的にし、駐輪スペースを考慮した広いエントランス広場にシンボル花壇を配置するとともに、前面道路とのバリアフリー化を図り、インターロッキング舗装を施した。そのため、開放的な入口に何らかの車止めの設置が必要となり、視覚的には圧迫感を感じさせない金属パイプ状の車止めが設けられたため、自転車でのストレートなアクセスができにくくなっている。Y公園への行き方は表10に示すように「自転車」の利用が過半数を占め、歩道のない前面道路からのアクセスを考えると公園へのスムーズな進入が望まれるであろう。

表10 Y公園への行き方

徒歩	自転車	その他	キックボード	スケボー	無回答	総計
38	95	8	1	1	20	163
23.3%	58.3%	4.9%	0.6%	0.6%	12.3%	100.0%

### (2) ワークショップの課題とこれから

ワークショップ方式による都市公園の再整備計画策定の背景には、「公園が市民ニーズに適合し、市民の積極的な利用と施設管理への市民参加を促す」目的がある。この市民ニーズは地域の実情によって「防犯対策」「ホームレス対策」がメインに出されることもあれば、Y公園のように周囲を住宅によって囲まれ視線がよく通る立地の場合には、防犯よりも犬や猫のフン対策や草取りなど管理の問題が主としてワークショップの議題になったりする。しかし老若男女を集めたワークショップでは、総じて「小さな子どもからお年寄りまで楽しめる」といった総花的な公園再整備の基本方針が掲げられることになる。先に述べた小学生の遊びの実態と公園評価から、小学生の遊びニーズと公園再整備計画の課題についてまとめる。

表9 「こんな公園がいいな」

	うんこ	ペット禁止	ゴミ箱	遊具	長いすべり台	ボール遊び	ゴール	トイレ	休憩場所	入口	自転車置き場	怒られない	きれい	花壇	虫がいない	広さ	犬	芝生	夢	ピクトープ
1			1	1		1														
2				1					1	1	1									
3	1			1		1	1													
4				1						1	1		1	1						1
5																				
6				1							1									
8						1				1		1								1
9					1															
10						1				1			1							
11								1		1			1							
12																				
13																				
14									1	1										
15					1					1										
16																				
17				1																
18					1															1
19													1							
20				1																
21				1		1										1				
22																				
23										1			1				1			
24				1																
25				1	1															
26																				
27																		1		
28																				





街区公園は誘致距離250mの範囲内で1箇所当たり面積0.25haを標準として配置される。しかしながら自転車を移動手段として用いる小学生の行動範囲はもっと広い。H小学校区には6つの街区公園と幼児遊園が1箇所、都市緑地が2箇所あり、この他公団住宅の敷地内のプレイスペースを含めて色々な公園が子どもたちの遊び場となっている。単独の公園の整備計画ではどうしても導入施設は限られたものとなり、似通った地域の状況であればどの公園も少しずつ物足りないものになってしまう恐れがある。季節を感じさせる木、特徴ある遊具などは1つの公園単独で計画するのではなく、小学校区などある程度まとまった範囲内に立地するいくつかの公園においてトータルに構想し、個々の公園に特化した特徴と魅力をもたせる計画手法が必要と思われる。

## ② 地域連携

日常的な管理の困難な街区公園においては、水やりや苗の植え替え等を必要とする花壇は設置が難しい。Y公園ではワークショップに参加したH小学校の継続的な協力を得ることで、公園の入口エントランス広場に公園の顔とも言えるシンボル花壇の実現を見た(写真②、③開園式)。しかし、児童の成長と教員の入れ替わりのある小学校の継続的協力は実際には難しく、公園愛護会<sup>\*2)</sup>の組織があっても花壇の管理は困難を極めている(写真④)。また、小学生の公園に対するニーズの中には「きれいな公園」「糞のない公園」といったキーワードが多く抽出され、ペットであれ野良であれ飼い主のマナーや地域での共同管理なしには動物との共生は難しいことは明らかである。

また、杉本(2011)<sup>\*3)</sup>は自分の親以外で親代わりとなって面倒を見てくれる「社会的親」の不在が地域の教育力の低下を招き、見て見ぬふりをする社会をつくり出したと指摘し、この「社会的親」をつくるために「子どもの居場所づくりから大人の居場所づくり」を進めているが、地域の公園はまさにその場に相応しいと考えられる。しかしながら、小学生の公園に対するニーズの中には「怒られない公園」という要望があげられており、ボールが近所の家に入り込み大人から怒られている現状がうかがえる。ボール遊びと公園施設(広さやフェンス)との不適合が、「怒られる」という子どもにとって理不尽に感じるものとなり、健全な「社会的親」の成熟を妨げているように思われる。子どもの遊びに対するニーズに整合した公園の整備計画の必要性を痛感するところである。

公園管理への市民の積極的参加と地域コミュニティの活性化へのきっかけとしてワークショップは一つの役割を担っていることは明らかであるが、その継続のためには子どもの遊びを含めて地域における人的交流が公園という媒体を通して絶えず行われることが必要であろう。ワークショップは参加した地域住民の顔見知り度を増すだけでなく、まちづくりに興味を持ち人と人とのネットワークが重要な役割を果たすことがある。ワークショップの果たす役割として、単に住民のニーズが反映された公園の再整備計画を作成することだけでなく、その後の管理運営に寄与する人材養成をも視野に入れたものであることが望まれる。公園再整備後の長期的な地域連携が、公園本来の大きな目的である子どもの遊びの活性化につながるものと思われる。



①柵で囲まれた砂場



②花壇の植え込み



③整備直後の花壇



④花壇（5年後）

### 【注】

- \*1) 安恒万記 『都心における子どもの遊び環境について - 「放課後の遊び場づくり事業」事例-』筑紫女学園短期大学紀要 第40号 P39-51 2005
- \*2) 福岡市においては1170の公園で公園愛護会が結成され、除草、清掃等の日常的な管理作業が実施されている。さらに街区公園においては、公園愛護会及び地域コミュニティの活性化を図る方法として、地域内連携による公園管理モデル事業が模索されている。
- \*3) 杉本厚夫 『「かくれんぼ」ができない子どもたち』 ミネルヴァ書房 2011

### 【参考文献】

- 佐藤一子 『子どもが育つ地域社会』 東京大学出版会 2002
- 新・放課後等の遊び場づくりモデル事業検討・提案会議 『報告書』 2010

(やすつね まき：人間福祉学科 准教授)

